

## 令和5年度 学力向上重点指定校報告書 福木小学校

## 1 学校の課題

## 【全国学力・学習状況調査（第6学年対象）】

	平均正答率		正答率30%未満の児童の割合		正答率30%～60%の児童の割合	
	国	本校	国	本校	国	本校
H31	66.6	55	8.8	22.7	26.8	37.3
R3	70.2	59	4.8	10.4	23.9	39.2
R4	63.2	50	8.9	22.2	29.9	39.4
R5	62.5	52	9.8	19.9	31.2	30.4

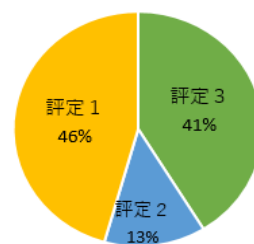
今年度の全国学力・学習状況調査の結果を見ると、本校の平均正答率は、全国平均と比較して10%以上下回っていた。正答率30%未満の児童の割合が全国平均の2倍以上あり、正答率60%未満の児童と合わせると半数を超える結果になっている。過去4年間の結果を見ても同じような傾向が続いており、本校ではこれまでの学習内容が定着していない児童が多い状況が継続しているといえる。

調査問題の解答状況を確認すると、図(2)「3種類のファイルを23人分並べた長さの求め方と答えを記述し、全部のファイルを棚に入れることができるかどうかを判断する」問題、図(4)「 $66 \div 3$ の筆算の仕方を説明した図を基に、筆算の商の十の位に当たる式を選ぶ」問題の正答率が、全国平均と比較して20ポイント近く低かった。このことから、正答にたどり着くまでのプロセスを説明したり、そこで出てくる数字の意味を考えたりする「思考・判断・表現」を苦手としている児童が多いことが分かる。

また、児童質問紙調査において、「算数の勉強は好きですか」という質問に否定的な回答をした児童の割合が、43.5%と半数近くあり、その中でも「全く当てはまらない」と回答した児童が26.1%を占めていた。4月に3、4年生を対象とした学習に関する質問紙では、両方の学年で同じ質問に対する肯定的評価の割合が80%近くを占めていることから、学年が上がるにつれ、算数に対する意欲が低くなっていることが窺える。算数という教科の特性上、前の学年で躓いた内容があると、次の学年でも躓いてしまうということが起こるため、下の学年での躓きを引きずったまま次の学年に上がっていきってしまう児童が多いのではないかと考えられる。

## 【第3学年対象 標準学力調査（算数科）の結果から】

令和5年 (5月)	平均正答率	
	全国	本校
	74.6	70.1



また、5月に第3学年を対象に実施した標準学力調査の結果を見ると、評定1の児童の割合が学年全体の46%と半数近くを占めており、学力の定着に課題が見られた。調査問題の解答状況を見ると、「長方形を並べてできた四角形が、正方形になる理由を言葉で説明する」問題に、23.7%が無解答で、類型外の解答も57.0%と、他の問題に比べて高い比率になっていた。このことから、第6学年と同様に、学力の定着に課題が見られること、正答にたどり着くまでのプロセスを考え、説明することが苦手であるといった課題があることが分かった。

以上のような実態から、本校の課題を以下にまとめる。

- ① 学力が定着せず、評定1、正答率30%未満の児童の割合が多い。
- ② 算数科に対する苦手意識が強く、学習に意欲的に取り組めない。
- ③ 正答にたどり着くまでのプロセスを考え、説明することが苦手。

## 2 研究主題

『やってみよう』『できた!』に支えられた学力の向上  
～算数科における個の学びが充実した授業づくりの工夫～

## 3 取組内容

### (1) 授業改善

#### ○ 授業の流れのパターン化

「福木小算数科授業モデル」として、右の図に示すような流れで算数の授業を行った。いつも同じ流れで学習を進めることで、安心感をもって授業に臨めるようにした。



#### ・ めあて

めあては本時の課題を子どもの中で明確にさせるため、子どもたちの言葉からつくるようにした。本校では、「本時の課題を提示」→「前時の課題との違いを見つける」という流れにすることで、本時に考えることを明確にし、めあてにつなげることを意識した。

#### ・ 個人思考・集団解決

個人思考では、課題のある児童でも課題解決のための考えを持てるようにするために、友達の考えを見たり聞いたりすることも認め、個人思考の進め方を児童が選べるようにした。「オクリンク」を積極的に活用することで、いつでも友達の考えが見られるように工夫した。

集団解決では、様々な意見の違いや共通点に目を向けさせることで、本時の課題の解決方法を共有するようにした。個人思考と集団解決の時間を通して、子どもたちが「分かった」という実感が持てるようにした。



#### ・ 評価問題

本時で学習した内容が理解できているかどうかを確認するために、評価問題を行った。評価問題には1人で取り組ませ、教師が丸つけをしながら、必要に応じて個別支援を行った。評価問題は内容や問題数を精選し、本時で学習した内容を見れば答えにたどり着けるような問題にした。そうすることで、クラス全員の合格を目指し、子どもたちが「できた」を実感できるように工夫した。



#### ・ 適用問題

評価問題が終わった児童から、本時の課題に沿った適用問題に取り組むようにした。ドリルパーク、プリント、オクリンクでの問題作りなど、選択肢を与えることで自分に合った内容が選べるように工夫した。

### (2) 補充学習

#### ・ ぐんぐん学習

週に2回火曜日と金曜日の朝10分間を全校で算数科の補充学習にあてる時間を設定した。1、2学年では主に計算力の定着を目指してドリルパークの計算問題を中心に、3学年以上の学年では、「私の算数パワーアップ計画書」を活用して補充学習に取り組んだ。「計画書」では、「まとめテスト」や「計算復習チェック」の中で自分が間違えた問題を見ながら、「どこで間違えたのか」、「何が分かっていなかったのか」という視点で誤答の分析をさせた。その上で、何を練習すればできるようになるのかを考えさせ、ドリルパークで取り組む内容を決めさせて取り組むようにした。自分が苦手な単元がどこなのかを知り、それを解消するために取り組むという自主学習の流れをつくり、「計画を立てて学習に取り組む力」を身に付けることを目的として行った。

(3) 研究推進体制

指定校2年目の今年度は、学力向上のための取組を学校全体で行っていくことを目指した。

・ 授業研究

全学年で「福木小算数科授業モデル」を基にした授業研究を行い、校内全体研や公開研究会で授業を公開した。昨年度の研究により、授業モデルが明確になったので、4月の校内研修で授業モデルについての説明を行い、5月に2つの学級で授業を公開することで、年度の早い段階で授業モデルを基にした授業のイメージを共有することを目指した。6月には5学年で公開研究会を行い、9月には1学年で校内全体研を、11月には2、3学年で公開研究会を行った。

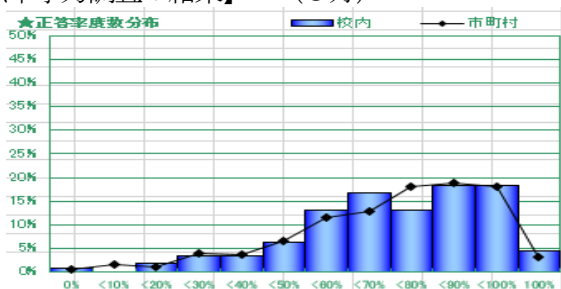
・ 研究主任との協力

本校は学力向上指定校2年目の継続校だが、昨年度の研究推進リーダーが研究主任となり、今年度の研究推進リーダーは変わった。研究主任が基盤となる昨年度の取組を創り上げていることもあり、今年度は研究主任と推進リーダーの両方が中心となり、研究推進を行った。5月の校内全体研では、研究主任が授業を公開し、授業モデルを基にした授業のイメージを伝えた。公開授業の指導案検討には、研究主任と推進リーダーの両方が参加するようにした。授業の相談をできる窓口を複数にすることで、授業改善の取組を一層推進できるようにした。

4 検証結果

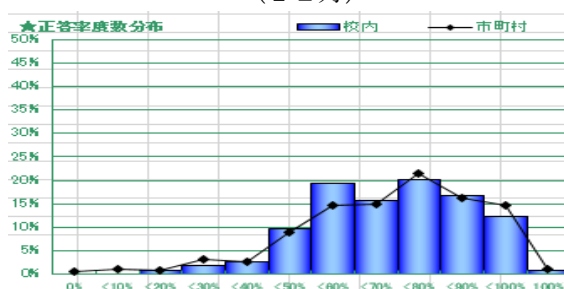
○第3学年

【標準学力調査の結果】 (5月)



平均正答率		評定1の児童の割合と人数	正答率30%未満の児童の割合と人数
全国	本校	45.6%	6.1%
74.6	70.1	52人	7人

(12月)



平均正答率		評定1の児童の割合と人数	正答率30%未満の児童の割合と人数
全国	本校	38.5%(7.1%↓)	2.6%(3.5%↓)
69.9	68.3	44人(8人↓)	3人(4人↓)

5月調査と12月調査を比較すると、本校の正答率は全国平均との差が縮まり、評定1の児童の割合も減少した。また、正答率30%未満の児童も減少し、評定3の児童が微増した。正答率60%以上の児童が増えており、全体的に学力が上がってきている。無回答率もほとんどの問題で減少していたが、本校の課題である正解までのプロセスを説明する記述問題では、無回答率が29.8%、類型外解答が52.6%と5月調査に続いて高い結果となり課題が見られた。

【児童質問紙の結果】

質問項目	肯定的評価の割合	
	5月	12月
算数の学習は好きですか。	75.7%	81.2%
算数の授業はよく分かりますか。	87.5%	91.5%
解き方が分からない時はあきらめずに考えていますか。	86.6%	86.3%
きまりを習う時、理由を考えていますか。	76.6%	76.9%
算数の授業は大人になって役に立つと思いますか。	93.2%	89.7%
自分の考え方が分かるようにノートに書いていますか。	70.8%	69.2%

児童質問紙調査によると、算数の学習や授業に対して肯定的なイメージを持つ児童の割合が増えていることが分かる。その反面、「算数が大人になって役に立つ」と考えている児童の割合が減少している。

【A児について】

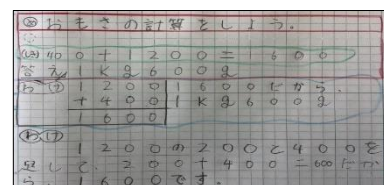
本児は算数に対して苦手意識があり、学力がなかなか定着しにくい児童であった。算数に対する意欲が低いわけではなく、前向きに取り組もうとするものの、授業の個人思考の場面ではやり方が分からなかったり、考えを表現できなかつたりするようなどころが見られた。また、学習したことで数字や表現の仕方が変わると、分からなくなってしまう様子も見られた。

授業が現在のスタイルになり、オクリンクを見たり、できている友達に聞いたりすることができるようになったことで、自力解決ができるようになった。自力解決できることで自信につながり、集団解決で発言することも増えた。評価問題をクリアすることが意欲付けとなり、その後の時間にドリルパークやプリント学習に意欲的に取り組む姿が見られた。本人も、「授業の最後に練習できる時間があるからできるようになってきた。」と実感している。

標準学力調査の結果を見ると、5月実施の調査では、「数と計算」で目標値より13ポイント、「図形」で目標値より30ポイント低い結果になっていたが、12月実施の調査ではいずれも目標値を上回る結果となった。

A児の標準学力調査の結果

	5月	12月
正答率	65.6	84.4
評定	1	3



「分かったこと」「がんばったこと」「もっと学習したいこと」などを書きましょう。

おかだくんのわかりやすかったので、さんこうにしてみます。

【B児について】

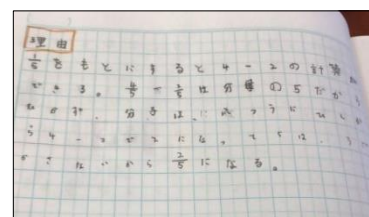
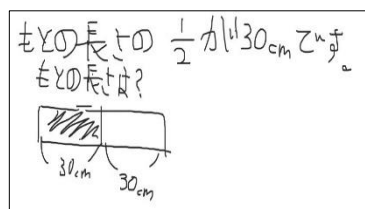
本児は算数を得意としており、理解力も高い児童である。4月当初から算数の授業にも意欲的に取り組み、授業中の発言も多かった。また、なぜその式になるのか、どうやって課題を解決したのかという根拠を持つこともできていた。

オクリンクで友達と考えを共有するようになり、根拠をより分かりやすくノートに書いたり、図を使って説明したりするようになった。また、自分の考えを友達に説明したり、自分と違う考えの友達と話したりする姿も見られるようになり、学習を止めずに学び続ける姿勢が身に付いた。適用問題を解く時には、プリントやドリルパークの問題に取り組むだけでなく、本時に学習した内容の問題を自作することにも取り組むこともあった。

標準学力調査の結果を見ると、5月調査では「10000までの数、分数」の正答率が60%、「時刻と時間」の正答率が50%だったところ、12月調査ではいずれも100%の正答率になった。

B児の標準学力調査の結果

	5月	12月
正答率	78.1	87.5
評定	2	3



5 研究成果

【成果】

○ 学習意欲について

授業改善を行ったことで、授業中の学習に取り組む態度が変容してきた。特に自力解決と評価問題が効果的だったのではないかと考える。自力解決でオクリンクを使ったり、友達に聞きに行ったりすることができるようになったことにより、評定1の児童でも自分の考えを書くことができるようになってきた。評価問題では全員を合格させるように意識したことで、クリアすることへの喜びと、これだけは解かないといけないという意識が子どもたちにも出てきた。評価問題をクリアすることによって「できた」という実感がわき、次の学習への意欲につながっている。

## ○ 学力の定着について

学力の定着には、適用問題と補充学習が効果的だったのではないかと考える。5月調査で評定1だった児童が、評価問題を終えた後、黙々と用意したプリントに取り組んだり、学習した内容をドリルパークで復習したりしている姿が見られた。今まで意欲はあっても、学習の仕方が分からずにいた児童が、学びを止めずに取り組むことができるようになったため、学習内容の定着につながったのではないかと考える。評定3の児童の中にも、発展的なプリントを求めてきたり、学習内容とつながる次の学年の内容に興味を持ち、問題にチャレンジしたりする児童も見られた。補充学習では、現在取り組んでいる単元の復習をしたり、自分の苦手な内容を学び直したりすることで、学習内容の定着につながっている。

## ○ 研究体制について

昨年度は3学年が取組の中心となり、他の学年には研究内容が広がらなかったという課題があった。今年度も3学年が中心となつた取組であったが、3学年以外の学年にも授業改善の取組が広がった。4学年では「算数の目」を意識した授業の設計をした「わり算の筆算」や適用問題や補充学習に力を入れた「図形」の領域では、全国平均を上回る結果になった。6学年では昨年度の研究推進リーダーが中心となり、日々の授業改善に取り組んだ結果、基礎学力が向上するなど、着実に授業改善の取組が広がり、結果が表れている。

## 【課題】

## ● 記述問題への対応

本校の課題の一つである答えまでのプロセスを説明する問題に対しては、あまり改善が見られなかった。オクリンクによって友達の考えを見ることができるようにはなったものの、ただそれを写して分かったつもりになっている児童もいる。指導者側になぜそうすれば解決できるのかを問い返す姿勢が足りなかったため、集団解決での共有の仕方を改善する必要がある。

## ● 基礎学力の定着

3学年でも4学年でも、5月調査よりも12月調査の方が四則計算の領域で全国平均との差が開いていた。また、4学年では全体の正答率でも全国平均との差が開いた。学習内容が難しくなるにつれて、内容についていけなくなる児童が増えている。授業の評価問題の時間で個別支援を行っているが、そこだけでは支援しきれていない。授業改善が進んできてはいるが、自力解決で交流したり、問題に取り組む時間を確保したりすることがまだ不十分である。全校で授業改善の取組を徹底していく必要がある。